

民俗資料館だより

第14号 2007. 3. 31

発行 加茂市民俗資料館 電話 0256-52-0089

住所 加茂市大字加茂229-1 FAX 0256-52-0089

加茂市二万年前旧石器公園オープンと石器類の展示

加茂市民俗資料館長 中 滝 孝 明

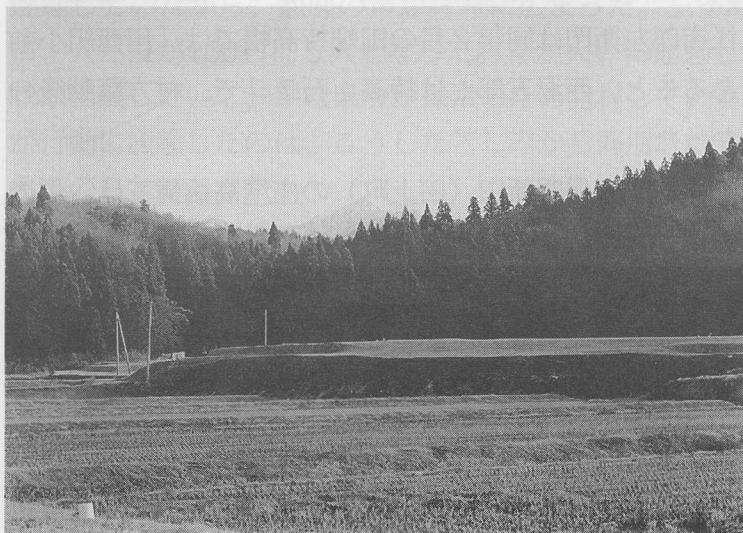
皆様方には、日頃民俗資料館をご利用いただきましてありがとうございます。

当民俗資料館は、郷土への愛着心の高揚と、先人が培ってきた歴史や文化の資料などを後世に伝えることを目的として昭和49年8月開館いたしました。

現在全体の収蔵品としては、約22,000点ありますが、そのうち約1,200点を館内に常時展示しております。展示品は、加茂の祭り、歴史、古文書、また市内から出土した石器や土器などから、加茂の産業の歴史に関連した建具の製造行程や木工の特産品、漢方薬の製造器具、加茂縞の機織り機、陣ヶ峰瓦、紙すき用具など、いずれも日常では見る機会のほとんどない貴重な資料ばかりとなっています。

また、昨有加茂市では、七谷地区上大谷地内に「加茂市二万年前旧石器公園」をオープンしました。現地には、トイレ、ベンチ、説明看板も設置され、訪れた皆様方がゆったりと旧石器時代に思いを馳せることができるよう整備されています。ここで発掘された石器類は当民俗資料館に展示されています。

皆様方におかれましては、是非「加茂市二万年前旧石器公園」を訪れていただくとともに、あわせて当資料館も気軽にご利用いただきますようお願い申し上げます。



加茂市二万年前旧石器公園遠景



丸山遺跡（加茂市二万年前旧石器公園）出土の石器

大でき加茂新田 —明治5年大河津分水騒動をめぐる—

加茂市文化財調査審議会副委員長 溝 口 敏 磨

明治5年(1872)4月、大河津分水工事の過大な負担に苦しんだ民衆1万数千人が、工事の中止を求めて、新潟・柏崎の両県庁に嘆願に押し掛けた大騒動(首謀者とされた渡辺悌助の名前から悌助騒動とも)が発生した。写真は、この事件を伝える「東京日々新聞」で、錦絵風の挿し絵入りでおどろおどろしく報道された。

この騒動で、新潟県庁をめざした一隊を率いたのは、旧会津藩士族の渡辺悌助(上条村に寄寓)、月岡村(三条市)安正寺の脱籍僧侶智観こと月岡帯刀(新聞に描かれているのはこの2人)、並びに加茂新田の農民入江市郎左衛門と西潟五郎七の4人で、加茂新田が旗揚げの地であった。渡辺・月岡は捕らわれて死刑、入江は騒動中に銃火で死亡、西潟は逃亡した。これら首謀者とされた者については、「おかみ」に逆らうなどは即悪逆犯と決めつける、封建の遺風が残っていた時代のせいもあり、「不逞のやから」「暴徒」とみなされ、参加した民衆も「頑民」「愚民」扱いされた。いきおい地元でも語ることが避けられてきたようである。

『加茂市史』(昭和50年刊行)編さんに伴い、地元加茂新田の同時期の文書資料が発見された。同村では、慶応4=明治元年(1868)4月に、小前農民が庄屋ら村役人による村勘定の不正を訴える村方騒動が起こり、その結果、庄屋・組頭の一齐交代が実現していること、入江市郎左衛門は同年2月の田畑持高帳では「川西組小前惣代」を名乗り、持高は2斗の小農であること、西潟五郎七は持高1石7斗で、村方騒動後の新しい組頭役に選ばれていることが分かった。

ところで、加茂新田と加茂川を挟んで立地する保明新田(田上町)の庄屋高橋健三は、信濃川洪水の解決策を大河津分水開さくに求め、奔走した先覚者として知られる。その健三が挺身した分水実現運動の詳細を書き留めた「信濃川治水日記」(明治元年~20年)が、戦前の『信濃川改良工事沿革史』や『白根郷治水史』などに利用されてきたが、日記原本の所在は不明であった。それが近年に至り、信濃川大河津資料館の調査活動で弥彦神社宝物館に所蔵されていることが分かり、平成16年に大河津分水双書第三巻に抜粋収載された。ほかに、『新潟県史』を始めとする各自治体史にも、分水工事に関係した庄屋層の日記や記録類が逐次収録されてきた。それらに依拠して、分水騒動についての新たな展望を試みたい。



大河津分水騒動を伝える「東京日々新聞」
(『新潟県史』資料編14より)

1. 加茂新田でなぜ発生

明治3年、各町村の分水工事への負担額が、分水完成で予想される恩恵の度合いに応じて8等級に区分され、割り当てられた。新潟県管轄561町村でみると、最上位の「別1等」は27か村で、加茂新田は加茂市域では唯一ここに区分され、年貢米1石当たり金7両3分余を負担するものとされた。2番目の「第1等」の負担は金5両1分余で、以下、「第2等」4両2分余、「第3等」2両1分余と続き、最低位の「第7等」の負担額は約二分であった（『黒埼町史』資料編3）。「別1等」の負担金は、金1両は4分だから実に金8両に近く、2番目の「第1等」以下に比べて、格段に大きかったことが分かる。ちなみに、明治4年の「新貨条令」で1両が1円となり、5年当時の米価は1石がおおよそ5円であったから、「別1等」村には、封建制下の重い年貢の約1.5倍の負担金がかかっていたのである。

そもそもこの大河津分水工事は、維新政府が困窮した越後民衆の嘆願に応え、明治2年に全額官費で行うとしたもので、実際には、政府に資金がないため同年秋に一旦中止となり、その後また、工事費100万両の内、越後が60万両の地元負担金を調達することで、明治3年に再開が決まったといういきさつがあった。新潟県は、地元負担金を上納できない村に貸付金10万両を用意しているが、年1割の利子、5年賦返済の条件付きである（同上書）。工事費の自力上納ができない村は、その利息までも負担しなければならなかったことになる。

分水完成で大きな恩恵を受けると見込まれた「別1等」村とは、水害被害が最大で最も疲弊している村ということでもあるから、多くはこの貸付金に頼らざるを得なかったであろう。加茂新田の場合、たとえば明治17・18年に連続して洪水被害に見舞われたが、「新潟新聞」は、「加茂新田農民、水害に嘆息」「飢餓迫る加茂新田」などと報じているほどである。

かつて加茂近辺では、予想もしない上首尾の結果が得られたときに「大でき加茂新田」と形容したという。加茂川流末にある加茂新田は、堤防を越えた水が信濃川の堤防にも遮られて、容易に引かなかったから、「大でき（豊作）」など、思いも寄らぬ地だった故の表現であろう。

2. 市郎左衛門と五郎七の人物像

地元の負担は資金面だけでなく、鍋釜食糧等自弁という条件の人足役も強制された。当初完成年度とされた明治5年に入ると年貢高100石につき5人と増強され、しかも日当の支払いは遅延していたから、怨嗟の声が村々に広まった。三条町の商人松永嘉平の日記2月28日の項に、人足役が100石に5人となって村々が大いに迷惑し、中之口川筋には徒党を呼びかける回状が出回っていて、平松県令が探索のため回村している、と書かれている。入江・西潟の二人が行動に決起したのは、こうした苦しみから同朋を救済するには工事を中止するしかないと考えてのことであった。

入江市郎左衛門は、前述のように小前惣代役をつとめていることから、村内の小前農民の信望が寄せられていた人物であった。一方、明治元年の村方騒動後、小前層に推されて新しい組頭に就任した西潟五郎七について、高橋健三は「治水日記」欄外に、「少シク田産アリ、平常暴ナラズ」と後日に補筆している。騒動渦中に探索した旧村松藩士族は、西潟を「公事出入等かなりを好み、是迄可成の百姓二候得ども争論之為二身上向不如意二相成」と書いており、訴訟やもめ事に立ち入る（＝解決する才のある、そうした役割を周囲から期待されている）人物であったことを窺わせる。

取り締まる側からの「不逞のやから」「暴徒」像から離れて見る必要があるだろう。

民俗資料館

平成18年度の歩み

1. 入館者数

平成18年4月

）

平成19年3月

	市内	市外	計	団体
大人	269名	431名	700名	2
小中学生	585名	71名	656名	15
計	854名	502名	1,356名	17

2. 資料収集の状況

本年度は6名の方から59件107点のご寄贈を賜り御礼申し上げ、紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

足駄・雪下駄・^{ござつきゆきげ}た・刺し子前掛・蛇の目傘・^{すぐし}梳き櫛・ワラソーリ・ナガギモン・^{あわせ}裕・^{はんてん}半纏・タンボギモン・足袋・オシメ・台秤・^{ひのし}火熨斗・帯・銅鏡・^{たいた}裁ち板・ガラスの器・など

〈寄贈者ご芳名〉

家塚 ツヨ様・小富薬局様・志田 穂積様・志田 スミ様・安中 トシ様・金子米店様

3. レファレンス・サービス及びアンケート調査（民俗資料館への問合せ）

① レファレンス・サービス（30件）

- ・「青海神社の神領で塩作りは行われていたか。」
- ・「山島新田の地形図はないか。」
- ・「加茂市内の城館跡の名称及び所在地を知りたい。」
- ・「加茂市内明治・大正頃の建造物の資料がほしい。」
- ・「青海郷の範囲の中に下田村方面も入っているか。」
- ・「加茂市内から大量に出土した古銭について。」
- ・「下条の山の中から石器が出てきたが遺跡か。」
- ・埋蔵文化財包蔵地内の建築について
- ・七谷小学校6年生からの35の質問
- ・「厄払いをしたいので、守り本尊の文殊菩薩をお祭りしているお寺を教えて欲しい。」

② アンケート・調査・依頼（37件）

- ・遺跡台帳・市町村遺跡分布図の点検について（調査）
- ・埋蔵文化財担当専門職員等の状況調査
- ・馬越遺跡発掘調査の実施について（調査）
- ・民間調査機関の実態調査
- ・平成17年度博物館園活動調査
- ・出土品の文化財認定と県帰属文化財保管に関する調査について
- ・文化庁文化ボランティア活動に関するアンケート

4. 博物館実習

- ・7月31日～8月8日 新潟大学人文学部情報文化課程 1名
- 新潟大学人文学部地域文化課程 1名

5. 館 外 活 動

① 古文書講座

加茂山の静寂な雰囲気の中での古文書講座も24回を数えました。これからも毎年古文書講座を開いていきたいと思っています。

日 時 9月5日 9月12日 9月19日 9月26日 10月3日

各火曜日 午後7時～午後8時30分

会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室

講 師 加茂市文化財調査審議会委員

溝口 敏磨 関 正平 佐藤 賢次 長谷川 昭一 丸山 朝雄の各氏

参加者 延176名

内 容 共通テーマ「八幡（長瀬）神社資料を読む」

第1回 「長瀬神社、御神輿の御神幸をめぐる」

溝口 敏磨 氏

- ・上条村、加茂町の合併後の長瀬神社御神幸の行程変更許諾に関する八幡宮と青海神社両社の県知事への嘆願文書を解説する。
- ・加茂市史（昭和50年発刊）によると明治2年になっているが、古文書から判断すると明治6年に許可が下りたようである。

第2回 「幕府領直後の神社の対応」

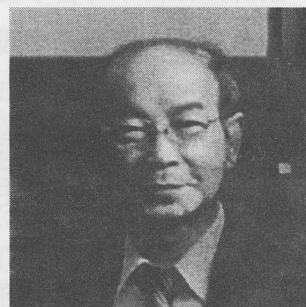
関 正平 氏

- ・新発田藩領時代の八段歩の社領が幕府領（天領）になっても引き継がれるように、新発田藩触頭仮役や名主等へ働きかけて、そのとおりになる事例を読む。
- ・なお、このような事例は青海神社でもあった。

第3回 「延享・天明の地改め」

佐藤 賢次 氏

- ・新発田藩は天明2年の地改め（小規模の検地）を実施するため通達をだすが、農民の抵抗を考慮して、古検地帳との差は、当面変更しないとしたが、後日趣意書を出し、地目変更・石盛りなどの細かい規定をする。
- ・また、藩からの役人の手伝いとして、名主や百姓の代表などに地改めの手伝いをさせている。



第4回 「村松藩主の八幡宮（長瀬神社）御参詣の覚書」

長谷川 昭一 氏

- ・下向途中に長瀬神社に参詣休憩のための前日からの村松藩の役人の宿割り・宿銭や、藩主が参詣したときの太鼓の打ち方・藩主への応答のしかたなどの儀礼の方法などを指示した記載がある。
- ・また、午後7時頃三条をへち、夜中の12時ごろ長瀬神社に到着、2時ごろ出立であり、夏の暑い盛りなので、夜中に行列を組んだのではないかと推測される。

第5回 「当社八幡宮濫觴」

丸山 朝雄 氏

- ・仲哀天皇の頃よりの家系である小池氏が平安時代の初めに八幡社を勧請、加茂次郎より社領を賜る。南北朝の頃一時衰退するも、戦国の初めに長尾為景により社田を賜わり、江戸時代には故実を^{ただ}糾して、八反歩と社領が決まる。

② 歴史講演会

加茂市内の本格的な発掘調査が始まって15年がたちます。そこで、今までの発掘調査の事などを考えてみました。

日 時 11月18日(土) 午後2時～午後4時

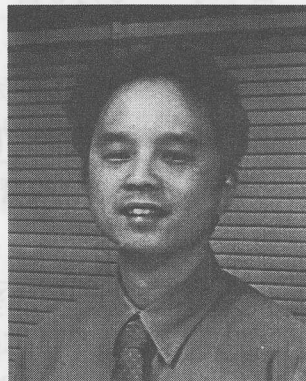
会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室

講 師 加茂市民俗資料館 学芸員 伊藤 秀和 氏

参加者 75名

演 題 「加茂市遺跡発掘15年の成果と課題」

- ・旧石器～縄文の遺跡が多い山間地の七谷地区と古墳～古代の遺跡が多い沖積地の加茂・下条地区とは対称的であり、地形的環境が特有の文化を育んだ可能性がある。
- ・弥生時代後期から古墳出現期及び、4世紀・8世紀頃の沖積地への進出・開発を示す遺跡が多く調査された。また、古代「青海郷」に関係した遺跡も多数あることが、わかってきた。
- ・7世紀・11世紀の遺跡は不明である。
- ・これらの遺跡は先人の足跡であり、記録保存した成果をどのように活用し、未来へ継承していくかが課題である。



③ 特別歴史講演会

講師には日本考古学会の元会長でもあり新潟大学名誉教授の先生をお招きし、加茂地域ばかりでなく新潟県全般の古墳やその時代のお話をさせていただきました。

日 時 2月24日(土) 午後2時～午後4時

会 場 加茂文化会館 小ホール

講 師 新潟市歴史博物館館長 甘粕 健 氏

参加者 87名

演 題 「越後平野と加茂市の古墳」

- ・信濃川左岸には前方後円墳の菖蒲塚古墳や前方後方墳の山谷古墳があり、信濃川右岸には保内の三王山古墳や加茂の宮ノ浦古墳や福島古墳群の円墳が次々に発見される。
- ・新津の古津八幡山古墳は高い山の上に築かれた環濠集落が廃絶の後、築造されている。交通の要衝であり、見晴らしの良い場所にある。
- ・古墳時代中期になると、蒲原地方から魚沼地方に古墳分布が移り、蒲原地方・魚沼地方・東山道へ通ずるルートが開発される。これは北陸ルートの衰退を意味する。



加茂市の遺跡 平成18年遺跡発掘調査について

加茂市教育委員会社会教育課係長 伊藤 秀 和

本年の遺跡調査は、開発事業に関連した確認調査が2遺跡、本調査が2事業により1遺跡を対象に行われた。

1. 馬越遺跡—古墳・古代・中世—

所在地 加茂市大字下条字馬越

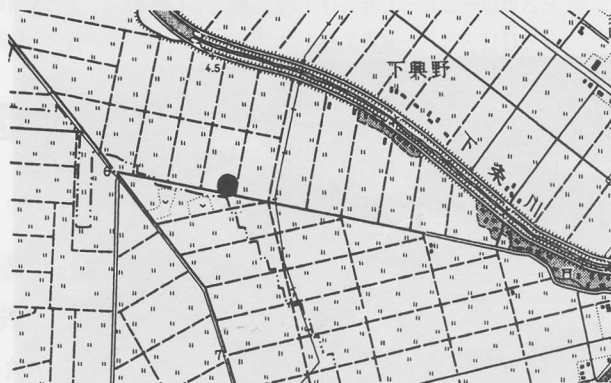
調査面積 ①約3,137㎡ ②2,903㎡

調査期間 ①平成18年8月7日～11月17日

②平成18年8月28日～11月14日

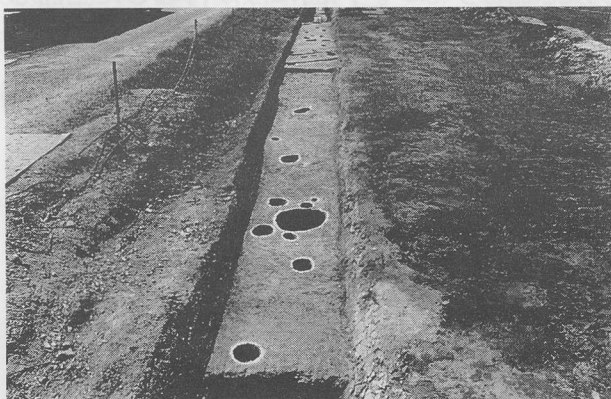
調査原因 ①吉津川地区県営ほ場整備事業

②国道403号線バイパス取付道路建設工事

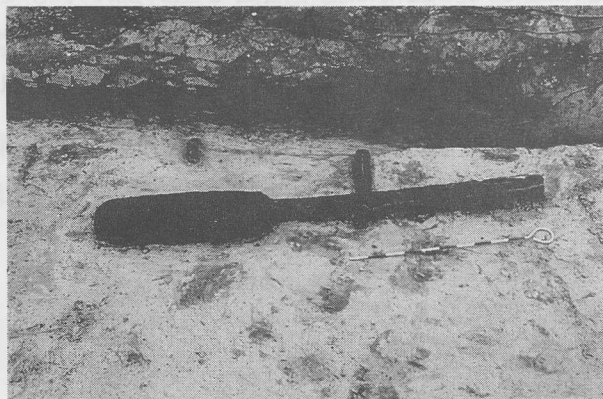


馬越遺跡位置図 S = 1 / 25,000

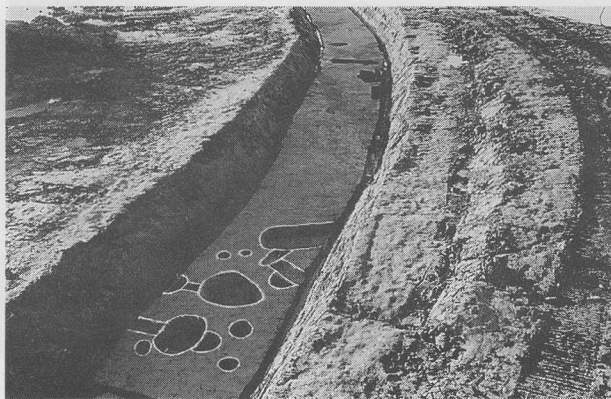
調査の概要 ①吉津川地区県営ほ場整備事業 昨年度に引き続いての調査である。地点によりC～K地区に分かれる。E区では上層に中世（鎌倉時代）、下層に古代（平安時代）の遺構・遺物が確認された他は、平安時代の集落跡が濃密に発見された。畝状溝や土坑が中心となる。遺物では土師器、須恵器が中心であるが、D・K区から銚^{かたいかなぐ}帯金具が2点出土し、注目される。また、F区からは櫓と見られる木製品が出土し、内水面交通を裏づける貴重な遺物である。



E区 中世の遺構



F区 櫓の出土状況



I区 完掘状況

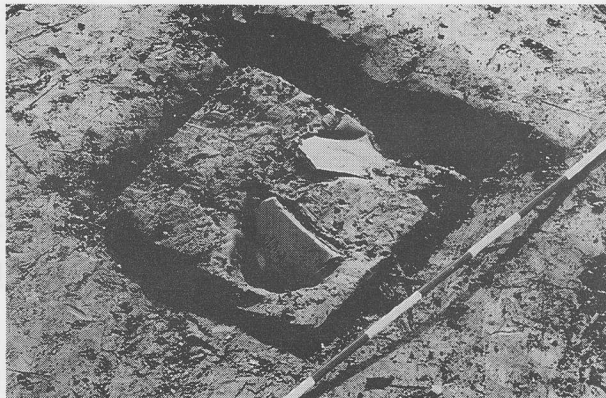


K区 完掘状況

②国道403号線バイパス取付道路建設工事 調査区中央部から平成11年度に調査された河川と同一と見られる河川跡が検出された。数ヶ所から土器が集中的に出土している。全体は不明ながら、河川に平行する向きにやや大型の掘立柱建物跡が配置される。地震の痕跡（噴砂）も多数見られた。遺物では「三宅」墨書土器が注目される。8世紀後半を主体とする。



河 川 跡

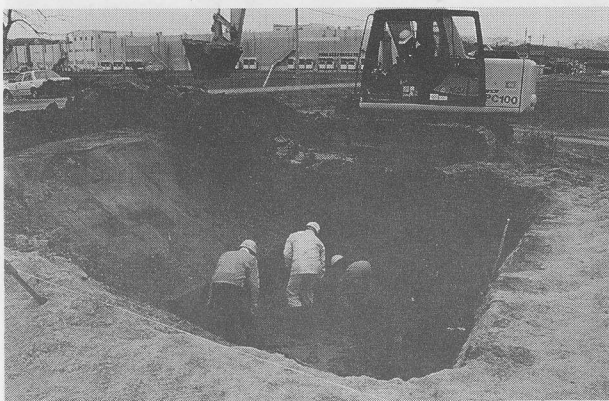


「三宅」墨書土器

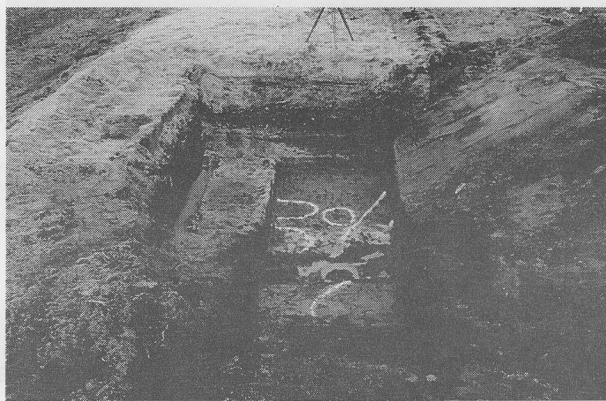
2. 開発に伴う市内遺跡試掘・確認調査

いずれも携帯電話基地局建設工事に係り、下条地区の中沢遺跡、中大谷地区の草生津遺跡を対象に確認調査を実施した。中沢遺跡は1トレンチ、約20㎡が調査された。現況は畑で、約1m程の盛土が存在したが、旧耕作土の下層と約20cmの間層を挟んで、2枚の遺物包含層及び遺構確認面が検出された。上層面からは溝状遺構、下層面からは南北方面に伸びる溝や土坑を確認した。遺物は上下層とも土師器が中心で、須恵器は少ない。内面に漆が付着した土器も出土した。上下層ともに10世紀前半頃を中心とする。

草生津遺跡は4トレンチ、約9㎡が調査されたが、耕作土直下に礫層があり、遺構、遺物ともに確認できない状況であった。



中沢遺跡 作業風景



中沢遺跡 トレンチ全景

編集後記

今年は暖冬ですごくしやすいと思っていたら、3月に入って寒い日が続き、取り外したスノータイヤを履き直したり、風邪をひきなおしたりと、いつもとは違う冬になっています。

さて、「民俗資料館だより」第14号発行に当たり、お忙しい中、溝口敏磨氏（加茂市文化財調査審議会副委員長）より玉稿をお寄せいただきたいへんありがたくお礼申し上げます。

今後とも、市民の皆様や関係各位の一層の御支援・御協力をお願いいたします。